

オガサワラカワラヒワへの殺鼠剤影響の把握について

1. これまでの経緯

オガサワラカワラヒワに対する殺鼠剤の影響を把握するため、これまでに以下のような試験が行われている。

年	実施者	試験内容と結果
2020年	上野動物園、 小笠原自然文 化研究所	亜種オオカワラヒワを用いたプラセボ剤喫食性試験 高い喫食性を確認
2022年	東京都	オガサワラカワラヒワ（飼育個体）を用いたプラセボ剤 喫食性試験 高い喫食性を確認 実験下（飼育個体）においてベイトステーションへの侵 入を確認 （通常殺鼠剤を設置する場所までの侵入は未確認） スローパック剤の袋を自力で破ることはできない
2022年～ 2023年		

2. 今年度の予定

プラセボ剤を用いたハハジマメグロの殺鼠剤喫食試験

環境省母島自然保護官事務所

要旨

ハハジマメグロの殺鼠剤喫食可能性を検証するため、プラセボ粒剤及び誘引用の水場を用いた試験を実施した。ハハジマメグロの成鳥及び若鳥がみられる 2024 年 5 月末～6 月の期間内に 2ヶ所各 3 日間、のべ 6 回の試験を行った結果、ハハジマメグロは全ての日で誘引され、計 157 回センサーカメラで撮影された。5 月 31 日に 1 個体がプラセボ粒剤を 2 回啜る行動が確認されたが、他の個体ではプラセボ粒剤の喫食は確認されなかった。

以上から、ハハジマメグロが殺鼠剤を野外で喫食する可能性は低いと考えられる。

1. 目的

種の保存法に基づく国内希少野生動植物種に指定されているハハジマメグロについて、殺鼠剤の喫食可能性の有無を確認するため、母島島内に生息する野生下の個体を用いて殺鼠剤（ヤソジオン）のプラセボ粒剤（大きさや形状、主成分はヤソジオンと同様だがダイファシノン成分が含まれていないもの）に対する喫食試験を行うもの。

2. 試験対象地

3. 試験実施内容 プラセボ剤喫食試験

・試験期間：

予備試験：令和 6 年 1 月中旬～4 月上旬（パパイヤによる誘引）の計 28 日間
同 5 月 30 日（水場による誘引）

本試験：令和 6 年 5 月 31 日, 6 月 20 日, 6 月 21 日 の計 3 日間

・餌台に使用した資材：

10 号陶器皿 直径・32cm 高さ・6cm

フラワースタンド 縦・40cm 横・約 40cm 高さ・約 120cm

プラセボ粒剤 ヤソジオン（大塚薬品工業株式会社）の有効成分無添加のもの

1 粒約 5mm 角の立方体で重量は約 0.1g

・その他の設置物：

センサーカメラ（Hyke SP2-CL2）2 台 * 餌台設置地点に各 1 台

HD（1280×720 ピクセル）動画モードで 10 秒間撮影、センサー感度「中」

・方法

*予備試験

パパイヤによる誘引

餌台にプラセボ剤及び誘引餌のパパイヤを設置し、訪れた鳥類がプラセボ剤を喫食す

るかの観察を行った。のべ 74 回試験を行なった結果、ハハジマメグロは内 6 日間で計 10 回餌台に誘引されたが、プラセボ粒剤の喫食は確認されなかった。有識者（森林総合研究所 川上氏、アイランズケア 川口氏）からは、試験結果から喫食可能性は低いと考えられる旨のコメントがあった一方、より警戒心が薄い若鳥がいる時期に、水場を用いて誘引することが推奨された。

水場による誘引

小鳥用の水場及びセンサーカメラを設置し、中央に足場となる石を配置して日中の撮影を行った。6.5 時間の観察期間にメグロが各地点 30 回程度撮影され、水場により十分な誘引が行えると判断した。

本試験

5 月 31 日、6 月 19 日、6 月 21 日

予備試験と同様の小鳥用の水場及びセンサーカメラを設置し、足場となる石の上にプラセボ粒剤 10g を設置して喫食状況の観察を行った（図 5）。誘引された鳥類はセンサーカメラの動画から種名、羽数及び行動（器に止まる、飲水、水浴びまたはプラセボ喫食）を観察し記録した。

4. 試験結果

計 2 台・3 日間の試験を通してハハジマメグロが計 157 回撮影された（詳細は別表（参考資料）のとおり）。ただし、センサーカメラの設定上、同一個体が長時間水場に滞在した結果、複数回撮影されている場合も含む。

5 月 31 日 13 時 33 分、1 個体のハハジマメグロがプラセボ粒剤を 2 回啜る様子が観察された（図 6）。1 回目はプラセボ粒剤を啜ったのちカメラに背を向けたため、飲み込んだかどうかは明らかではない。2 回目はプラセボ粒剤を啜り、くちばしで割る様子が見られたが、大半の欠片は下部に落下し、飲み込んではいないように見えた。

その他の個体はプラセボ粒剤に興味を示さず、喫食するそぶりも見受けられなかった。また、ハハジマメグロの他にもメジロ、ハシナガウグイス、イソヒヨドリ、オガサワラヒヨドリ、アカガシラカラスバトが少数飛来したが、いずれの種においてもプラセボ剤の喫食は確認されなかった。

(a) プラセボ粒剤を啜ったハハジマメグロ（1 回目）



(b) 背を向けたため飲み込みの有無不明



(c) プラセボ粒剤を啜えたハハジマメグロ (2 回目)



(d) プラセボ粒剤をくちばしで砕く
赤丸が砕けて飛んだプラセボ粒剤の欠片



図 6 プラセボ粒剤を啜えたハハジマメグロの様子

5. 考察

ハハジマメグロの撮影回数 157 回に対し、ハハジマメグロがプラセボ粒剤を啜る行動が見られたのは 1 個体のみで、啜る回数も 2 回のみであった。このため、ハハジマメグロがプラセボ粒剤に誘引されたり、選好性、喫食性を持つ可能性は低いと考えられる。

今回の試験を行った期間はハハジマメグロの繁殖期中期～後期にあたり、ハハジマメグロ成鳥及び若鳥がみられる時期である。成鳥だけでなく、より警戒心の弱い若鳥がいる期間においても、ハハジマメグロがプラセボ粒剤を喫食する割合は十分に低かったことから、ハハジマメグロによるプラセボ粒剤の喫食リスクは低いものと考えられる。